

『舞姫』の真実

小金井喜美子（実妹）『森鷗外の系族』

あわただしく日を送る中、九月二十四日の早朝に干住からお母様がお出になつて、お兄様があらで心安くなすつた女が追つて来て、築地の精養軒に居るといふのです。私は目を見張つて驚きました。（中略）

大急ぎで又お帰りでした。八日も帰りの晩に、お兄様はすぐ其話をお父様になすつたさうです。ただ普通の關係の女だけれど、自分はそんな人を扱ふ事は極不得手なのに、留學生の多い中では、面白づくに家の生活が豊かな様に嗜して唆す者があるので、根が正直の婦人だから真に受けて、「日本に往く」といつたさうです。踊もするけれども手芸が上手なので日本で自活して見る気で、「お世話にならなければ好いでせう」といふから、「手先が器用な位でどうしてどうしてやれるものか」といふと、「まあ、考へて見ませう」といつて別れたさうです。

其晩干住で打合はせての翌日精養軒で、初めて事件の婦人、名をエリスといふのに逢つて話して来ました。心配になるので早速に、

「どんな様子の人ですか」

「何小柄な美しい人だよ。ちつとも悪気の無ささうな。どんなにか富豪の子の様に思ひ詰めて居るのだから。随分罪な事をする人もあるものだ。」

それだけしか話しませんかつた。それからエリスの氣持を柔らげ、こちらの様子をも細かに程々話して聞かす為に、暇のあり次第、毎日主人は精養軒に通ひました。（中略）

かれこれしてゐる中日も立つてだんだん様子も分つたと見え、あきらめて帰国仕様がといひ出したさうです。そこで日を打ち合はせてお兄様もお出になり、色々と相談していつの船といふ事もきまりました。それが極まつてから、忙しいので二三日間を置いて又精養軒へ行つて見ましたら、至つて機嫌よく、お兄さんと一緒に買物したとて、何かこまこました土産物を並べて嬉しさうに見せたさうです。手仕事に興味のあるといふ人だけに、日本の袋物が目にとまつて種々買ったさうでした。其無邪気な様子を見て来て、

「エリスは全く善人だね。むしろ少し足りない位に思はれる。どうしてあんな人と馴染になつたのだらう。」

「どうせ路頭の花と思つたからでせう。」

帰国ときまつて私はほつと息をつきました。旅費、旅行券、皆取り揃へて、主人が持つていつて渡したさうです。

十月十六日午後築地へ行き、落会つてお兄様とエリスと三人連れで横浜へ着きますとお兄さんが早くからすつかり用意して待ち受けてゐられました。夕食後には一緒にそこから散歩して、馬車道、太田町、弁天通などへも往つたさうです。翌朝早く起き、七時に船に皆乗り込んで、仏蘭西本船まで見送つたのです。人の群の中に並んで立つて居るお兄様の心中は知らず、どんな人にせよ、遠く来た若い女が、望みとちがつて帰国するといふのは、まことに氣の毒と思はれるのに、舷でハンカチーフを振つて別れていつたエリスの顔に、少しの憂ひも見えなかつたのは、不思議に思はれる位だつたと、帰りの汽車の中で語り合つたとの事でした。

エリスはおだやかに帰りました。人の言葉の真偽を知るだけの常識にも欠けて居る。哀れな女の行末をつくづく考へさせられました。（中略）誰も誰も大切に思つて居るお兄様にさしたる障もなく済んだのは家内中の喜びでした。（下略）